

長江流域と環瀬戸内海海域における民間神楽祭祀の実証的比較研究

研究代表者 広島工業大学環境学部 教授 三村泰臣

共同研究者 中国重慶市・西南大学中文系 副教授 王倩予

はじめに

民間芸能を含む日本の民間祭祀は大陸との交流のなかで成立・発展してきたとする見解は今や常識である。宋を中心とする漢民族の文明が東アジアに拡散していった影響下で、日本の民間祭祀は平安時代以降に再編成されたといわれている。しかしその交流過程について、両国の現地調査を踏まえた上での実証的研究はまだおこなわれていない。

本研究は中国との交流について否定的見解が強い日本の民間神楽祭祀の成立・発展過程を、東アジアの広がりの中で実地調査し検証をおこなうものである。長江中流域と環瀬戸内海海域の民間神楽祭祀に焦点を絞り、現地調査を踏まえた上で実証解明することを目的としている。

環瀬戸内海海域¹に伝承する民間神楽は質・量ともに豊富である（約 400 事例がある）。その中で芸予諸島の神楽は極めて貴重だが、これまでまとまった研究はなされなかった。筆者は平成 15 年からこの芸予諸島の神楽の研究を開始し、その骨格に「死霊供養」が存在していること、特徴として次の 4 点があることを明らかにした²。この特徴は広く環瀬戸内海海域の民間神楽にも認められる。

- (1) 神殿（こうどの）を建築する。
- (2) 藁蛇、藁人形、白布、天蓋などの装置を使用する。
- (3) 順逆の歌舞と神がかりの芸態が伴う。
- (4) 太鼓が祭祀をリードする。

これらのうち、(1)と(2)はすでに様々な機会に報告してきたので³、本報告では(3)と(4)を中心に報告したいと思う。環瀬戸内海海域の民間神楽にどうして(3)と(4)の特徴が見られるのだろうか。

この課題を解明するため、筆者は中国・長江中流域三角地帯（重慶市・湖南省・貴州省にまたがる山岳地帯）の少数民族が伝えている民間祭祀を調査した。主題としたのは長江中流域三角地帯に位置する重慶市酉陽土家族（ユウヤントウチャゾク）苗族（ミャオゾク）自治県后溪鎮（コウケイチン）の土家族の民間祭祀と、同市万盛区興隆鎮の苗族の死霊祭祀である。この調査事例を報告し(3)と(4)について考察をおこないたい。

¹ 環瀬戸内海海域とは厳密に言えば芸予諸島、防予諸島、備讃諸島、塩飽諸島を含む海域であるが、筆者は中国山地と四国山地の間に囲まれた広範な地域を念頭に置いている。

² 三村泰臣「名荷神楽の研究」『民俗芸能研究』39号、2005年、1～25頁。

³ 三村泰臣、王倩予「長江流域の死霊祭祀—重慶市酉陽土家族苗族自治県小河鎮桃坂村の「大道場」—」『民族藝術』Vol122、2006、100～107頁、三村泰臣「日中間祭祀祭場の比較研究」『山西長治賽社与樂戸文化国際学術検討会論文集』2006、203～212頁、三村泰臣「神楽の建築」『民族藝術』Vol123、2007、114～120頁、王倩予、三村泰臣「論中国南方の大道場和日本神楽の関係」『国際難文化学術研究会論文集 追根問髄』2007、208～219頁。

1. 土家族の民間祭祀

長江中流域三角地帯

長江中流域の四川省・貴州省・湖南省・湖北省・陝西省に囲まれたところに重慶市がある。面積 82,300 平方キロメートル、人口 3,000 万人。日本の中国地方と九州地方を合わせた面積をもつ広大な行政市である。中国開発特別区に指定され開発の息吹が目覚ましい。

この重慶市と湖南省および貴州省にまたがる山岳地帯（「長江中流域三角地帯」と仮称）に酉陽土家族苗族自治県がある（写真1）。県都の酉陽へは重慶市内から烏江（長江の支流）に沿ってバスでおよそ 10 時間も遡らなければならない。町を離れた谷々の集落では長江文明の担い手とされる土家族や苗族が昔ながらの暮らしを営んでいる。日本の古代祭祀や中世神楽を彷彿させるような神がかり・託宣や神遊びなど、多種多様な民間祭祀が残る類まれな研究フィールドである。

県庁所在地の酉陽からバスで1時間ばかり山岳地帯に入った所に平和で穏やかな后溪鎮がある。この后溪鎮郊外の小江村に巫女による「神がかり・託宣」を残す古い民間祭祀が伝えられている。長江中流域三角地帯の土家族の間に伝えられている巫女舞のひとつで、古くは苗族の間でも実施されていたという。長江文明の精神世界につながる民間祭祀ではないかと想像される。ここで筆者は神がかった少女（今は専業巫女があたることが多い）が地界に赴いて託宣する「游冥」と、天界に赴いて託宣する「請七姑娘」を参観した。民家の堂屋（神を祀る部屋）でおこなわれた（写真2）。このうちのひとつ「游冥」について報告する。



写真1 酉水の流れる長江中流域三角地帯。



写真2 神がかり・託宣する「游冥」。

游冥（ユウメイ）

游冥は個人から特別な依頼があった場合に限りおこなわれる。一般の女性を神がからせて地界に赴かせ、あの世のメッセージを託宣させる。18歳以下の未婚の女性が選ばれる（一般には村内で品行方正な12～13歳の少女。少年が選ばれることもある）。堂屋の奥に簡単な壇を整えて神座とし、そこに箸一膳を挿した豚肉と銭・神酒を供え、また初を盛った大椀を供える。この神座の前に少女を座らせ、周囲の者が歌で囃して神がからせ託宣させた。少女は集まった人々に歌舞によって地界のメッセージを託宣した。

游冥は少女と司霊者（当地の巫女があたる）の2人だけでおこなわれる。司霊者が少女の顔を布で覆い、線香3本を握らせる。司霊者が歌で語りかけると少女は線香を地に落とし歌い始め

る。紙銭が焼かれ籾が祭場に投げられる中、少女は左手を静かに上げ身体をピクピク震えさせながら神がかり状態に入っていく。周囲の者が歌って囃すうち、少女は両膝を両手で強く打ち歌いながら託宣する。拳を額に上げたり手を振ったりすることもある。周囲の者が神がかった少女に問いかけると、身体を激しく揺り動かし荒々しい息づかいで地界のメッセージを歌いはじめる。地界で何を見たか、誰に会ったか、誰が病気にかかるか、その時どのように対処すればよいか、また死者をどのように処置すればよいか、それらを歌で具体的に託宣していくのである。

託宣がおわると司霊者が少女の背中を叩く。顔を覆っていた布を外すと神がかりは解け、少女はまったく普通の女性に戻った。小江村の人々はこの託宣に従い病人祈祷の「打十保福」⁴や死者清めの「打繞棺」など各種の民間祭祀を執行している。次に後者の打繞棺について報告する。

打繞棺（ダジョウカン）

打繞棺は少女の託宣に従っておこなわれる死者供養である。遺族たちが棺の周囲を歌舞しながら廻り死者を清める神遊びである（「繞」は回るという意味）。頭に長い白布を被って垂らし、7日7夜にわたりこの死者清めをするという⁵。道教の影響も見られるが、長江中流域三角地帯の死者祭祀の様相をよく伝えている⁶。

死者の出た家は堂屋の中央に棺を据え、それを囲んで打繞棺をおこなう。堂屋の外に幡を、入口に紙垂を下げ、堂屋の内に下界は龍、中界は馬、上界には鳥を描いた三界の軸を掛け、その奥に壇を作り、壇と中央の棺の間に白い布を張り渡す。棺の上に線香と燈明をつけ幡を並べる。また棺の後方にも燈明をともし。天蓋を下げたりはしない⁷。祭主の他に5~6名（人数の決まりはない）の巫士たちが、太鼓（中太鼓）、大小の鉦（鏡）、唢呐（ラッパに類似した楽器）、ホラ貝などを鳴らし棺の周りで歌舞しながら死者を清めるのである（写真3）。

紙銭を焼き楽器が鳴りだすと、紺色の祭服をまとった巫士（頭に四角の帽子を冠る）が歌と詞で祈祷に入り、しばらくして歌舞となる。彼らは楽器を手にし、大鏡をもつ巫士を先頭に棺の周りで楽をかなでながらもつれ合うように廻っては廻り返す（八字を描いて棺の周りを廻ることもある）⁸。順に廻る時は急調子、逆



写真3 棺の周囲で歌舞し死者を清める「打繞棺」。

⁴ この病人祈祷の「打十保福」では、芸予諸島の神楽の「三宝荒神御繩」にとともよく似た藁人形が使われた。

⁵ この打繞棺は『日本書紀』に記されている天若日子を弔う「神遊び」を彷彿させた。

⁶ 平成19年3月23日、参観。巫士の系統を辿ると道教に近いが、道教儀礼ではなく完全な民間祭祀としておこなわれている。湖南省西部でもおこなわれている。

⁷ 打繞棺が死者を送るためでなく死者を清めるための祭祀だからである。

⁸ 八字を描く舞は蛇の舞といわれている。それはちょうど藁蛇を八字に廻らせる大元神楽の綱貫を連想させる。また阿刀神楽のハツ花の舞や、舞手が交差する行波神舞の荒神武鎮を想起させる。

に廻る時は緩調子で、全体として逆に廻ることが多い。

打繞棺の歌舞は棺の周りで止めどなく繰り返される。遺族も加わって棺の周囲を順逆に廻り、次々と紙花を投げ散らしながら舞い続けるのである（これを「散花」という）⁹。またその間に種々の祈禱があり、終わり近くに遺族たちを笑いに誘う物語がある¹⁰。この物語を聞いて全員が笑い合って打繞棺はおわる。

2. 苗族の死霊祭祀

除霊

打繞棺に類似した民間祭祀が苗族の伝えている「除霊」という死霊祭祀である。死者ではなく死者の霊（死霊）をあゝの世から迎えてそれを清め、再びあゝの世に送る死霊供養である。死者の霊を焼いて送るので「焼霊」ともいわれている。重慶市万盛区興隆鎮大場村の馬氏一族 83 名によっておこなわれた 2 日間にわたる除霊を報告する。

除霊は葬儀が終了した 13 日目からおこなってよいとされるが、一般には死後 2～3 年を経た吉日に数日間かけておこなわれる。土家族の死霊祭祀「道場」のように仏教や道教の影響を受けておらず、長江中流域三角地帯の中で最もプリミティブな死霊祭祀に属するのではないかと思う¹¹。

万盛区興隆鎮大場村の除霊は 29 歳で病死した男性（馬氏）の霊を供養するため、死後 2 年を経ておこなわれた。一族は「孝帕（コウバウ）」という白い布を頭につけ、それを腰のあたりまで垂らした装でこの除霊に参加した。身内の女性たちは交替で死霊に付き添い、慟哭して死霊を慰め続けた（写真 4）。また巫士たちは蘆笙（ロショウ）という竹と瓢箪でできた鈍い音を響かす笛を終日終夜吹き続け、順逆の歌舞を繰り返して死霊を慰めるのであった（写真 5）。



写真4 白い布を被り慟哭する身内の女性たち。



写真5 蘆笙を吹きながら柱を廻り死霊を慰める。

⁹ この散花は天蓋から紙花を散らす周防三作神楽の「花鎮め」の舞に相当しているように思う。

¹⁰ たとえば女は醜い女もいるが美しい女もいるなどといった内容の物語をする。天細女命の舞で周囲の神々が笑ったという『古事記』の記録と類似している。

¹¹ 三村泰臣「苗族の死霊祭祀「除霊」」『まつり通信』523号、2006年、2～3頁。

除霊の祭場

除霊は故人の堂屋を祭場にしておこなう慣例である¹²。祭場の正面奥に長さ1丈（約3メートル）、幅1尺（約30センチメートル）の白い布（「孝彩」または「財」という。死者の妻の兄が贈る）を張り渡し、中央に松柱または竹柱を立て太鼓を吊る。そしてこの柱と白布の間に死霊が宿る霊屋を据える。

柱に吊る太鼓は苗族の魂を表象する最重要の道具と考えられている。樟の大木を削りぬいた頑丈な作りの太鼓である（棺も樟を削りぬいて船形にするらしい。樟への信仰が認められる）。この太鼓の両面には前回の除霊で犠牲に捧げた牛の毛がついたままの皮が張ってあった。太鼓の中には鈴が2個入っている（祖霊や雷神が入っているともしられる）。一族の長はこの太鼓に供物をあげて大事に保管し、葬祭と除霊のときにだけこの太鼓を使用する。普段は太鼓を打つ事も太鼓に触れることも禁じられ、地面に直に置いたりもしない。

太鼓と同じように重要な装置が先述した死霊の宿る霊屋である。「簸簸（ボボ）」といわれる（ボボとはザルのこと）。この霊屋は径1メートル大の竹製のザルを台にして作った簡単なもので、前方が開いたドーム形をしている。霊屋の屋根は黒布で覆い（女性の場合は白布）、先端に白布を丸めて巻きつける（帽子を示すという）。その上に20センチメートル四方の柄物の布を5～6枚載せる（枕を表すという）。

この霊屋は死霊が宿るところであるが、死者そのものとも考えられている。この霊屋に鏡餅2重（「糍粑（チバ）」という）を入れ、その上に灯明をともししておく。鏡餅は蛇体、灯明は蛇体の目だと伝えられており、霊屋は死者そのものであると同時に蛇体と考えられている（写真6）。この霊屋の中に酒盃9個と占いに使う小竹を割って作った簡単な卦（ゴア）が一對置いてあった。



写真6 「霊屋」：蛇を象徴する二重の鏡餅がある。

除霊の祭式

除霊は堂屋と田んぼの2ヶ所を祭場にし（A）～（G）の順番でおこなわれた（表1）。

一日目

表1 「除霊」の祭式（重慶市万盛区興隆鎮大場村）

A	4:30～5:30	祭員が族長の家の太鼓をおろし、背篋（ベイドウ、苗族の使う背負子）に入れて祭場の堂屋まで運ぶ。
B	5:30～6:10	堂屋中央に柱松を立てそれに太鼓を吊るす。白布（孝彩・財）を正面に張り渡す。孝彩と柱松の間に霊屋を据える。準備が整うと関係者は堂屋内で会食し祭儀の役割を確認する。

¹² 変死者の除霊は屋外に切妻型の仮屋を建築しておこなう習慣がある。

C	6:10~7:00	丸めたチガヤ(茅)で太鼓を打つ(太鼓の霊を呼び求めるのだという)。蘆笙を吹いて一舞し、霊屋を堂屋の入り口に移し供え物(酒・飯)をする。卦で死霊が来るかどうか占う。籤がおりるとその都度9個の酒盃に酒を注ぎ死霊へ供する。訪れた死霊を霊屋に鎮座させ、蘆笙を吹き堂屋内に導き安置させる。
D	7:30~翌朝	死霊に食事を供し、太鼓を打ち、蘆笙を吹いて(祭文に相当する)死霊と語り合う。祭主は柱を順逆順に合計9度廻り(女性の場合は7度廻る)、兎歩の舞を繰り返し死霊を慰める。この間、縁者たちは線香を上げ死霊と語る。孝帕を着けた泣女が側で慟哭し死霊を慰める。

二日目

E	7:30~11:30	一同は行列を組んで堂屋から白布を張った田んぼの祭場へ移動する。太鼓を先頭に祭場中央の柱松の周りを全員が9度廻る。柱松には枝がつき、竹の鳥と長銭(御幣)のついた「招魂幡」(将軍幡ともいう竹竿)が立てかけてある。祭主が死霊を慰める祭文を唱える。蘆笙で死霊を慰めてから犠牲の牛を斧で打ち屠る。関係者は田んぼに残って死霊と食事する。泣女も留まる。
F	14:30~15:30	祭主は繰り返し卦で占い酒を大地に注ぐ(死霊に供する)。飯を霊屋の前方に投じる(孤魂に供する)。死霊を蘆笙で慰めおわると、孝彩・霊屋・柱松・太鼓を一気に倒す。すぐに供え物を紙銭の山(二山ある)で焼き尽くす。女たちは慟哭する。
G	15:20~16:00	関係者(子供も含む)が堂屋内で盃事をする。その後大小9個の竹盃に酒を入れ、肉を入れた椀を煙で清め、盃と椀を一同が競って奪い合い楽しむ。

堂屋の行事は表(A~D)から把握できるので、田んぼと後の行事(E~G)について補足の説明を加えておく。

死霊送り

2日目、堂屋の行事がおわると一同は太鼓を先頭に行列を組み、白い布を張り渡した田んぼの祭場へ向かう(写真7)。田んぼの中央には枝のついた柱松が立ち、その枝に太鼓が吊るしてある。柱松には竹で作った鳥と長銭(御幣のこと)のついた「招魂幡」(将軍幡ともいう)という竹竿が立てかけてある。縁者たちと舞手たちが蘆笙を吹きながらこの柱松(招魂幡)の周りを順逆に3周、合計9周廻る(写真8)。

朝食を済ませてから死霊との別れが始まる。巫士は祭文を詠み蘆笙を吹いて霊屋の死霊を慰める。これを繰り返した後、牛を犠牲にする(これを「牛を討つ」という)。関係者たちは田んぼの祭場に残り、そこで死霊と共に食事をいただく。女たちは霊屋から一時も離れず泣き続ける。

死霊を送る「焼霊」は太陽が沈む前におこなわれる。巫士は霊屋の前で卦を使って占い、籤がおりると供え物の酒を大地に注いで死霊を清める。また飯を霊屋の前に撒いて孤魂に供する。楽師は蘆笙を吹き順逆順に祭場を廻り、霊屋に近づいて蘆笙を吹きおえる。すると巫士は霊屋を一気に崩しにかかる。柱松も倒し太鼓もおろす。霊屋の中の供物を紙銭の山で燃やす。

霊屋に使った簸箕は大地に伏せその上に蘆笙を置く（中には銭と飯が入っている。銭は会場を務めた家の者がいただく）。霊屋が燃えるとき女たちは嗚咽する。祭場に張り渡した白布は煙にかざし死者の妻がそれをいただいた。この白い布は切って年下の者に配られる。この白布をもらった者は亡者の子孫になるといわれる。



写真7 太鼓を先頭に田んぼの祭場へ移動する遺族たち。



写真8 招魂幡の周囲を廻り死霊を慰める。

すべての祭儀が終了すると、関係者だけ（関係者の子供も含む）が堂屋に籠り杯を交わす。その後、酒（9個の大小の竹の盃）と肉（9個の茶碗に入れる）を奪い合う珍しい遊びがおこなわれた¹³。

3. 考察

長江中流域三角地帯における民間祭祀

重慶市酉陽土家族苗族自治州后溪鎮の土家族の民間祭祀「游冥」と「打繞棺」、同市万盛区興隆鎮の苗族の死霊祭祀「除霊」を紹介したが、長江中流域三角地帯にはこの他にも様々な民間祭祀がおこなわれている。十分な量の調査ではなかったが、当三角地帯には少なくとも2種類の民間祭祀がおこなわれていることが本調査からわかった。

ひとつは巫女の〈神がかり・託宣〉、もうひとつは巫士がおこなう種々の〈祭祀〉である。前者を〈タイプA〉、後者を〈タイプB〉とすれば、〈タイプA〉に「游冥」があり、〈タイプB〉に死者供養の「打繞棺」と死霊祭祀「除霊」がある。

この2種類の民間祭祀で特別に注意すべきことは、〈タイプA〉に依拠して〈タイプB〉がおこなわれていることであった。当三角地帯の民間祭祀には〈タイプA〉→〈タイプB〉の構造が認められた。また〈タイプA〉と〈タイプB〉は全く独立の民間祭祀としておこなわれていることも注意すべきことであった¹⁴。以上の調査結果をまとめると「表2」のようになる。

¹³ 法事が無事終了したことを祖先に報告するためにおこなうといわれている（祖先の話聞くのだともいう。その際、老人のようにしわがれた声で苗族の第一祖先についての話があるという）。本来は夫婦の部屋であるのだとも、竈の近くであるのだともいわれている。比婆荒神神楽で行われる「へっつい遊び」に似た遊びである。

¹⁴ 今日の長江中流域三角地帯の民間祭祀は、〈タイプA〉と〈タイプB〉が複雑に融合し、様式化・芸能化して多種多様な民間祭祀を形成している。同じ傾向は日中韓の民間祭祀にも認められる。

表2 長江中流域三角地帯の民間祭祀

民間祭祀	<タイプA>	<タイプB>		
	巫女舞	巫女 (少女)	神遊び	
巫女	巫女 (少女)	巫士 (世襲巫)		
祭祀	神がかり・託宣	病人祈祷	死者供養	死霊祭祀
事例	游冥/請七姑娘	打十保福	打繞棺	除霊/道場
芸態	歌	順逆の歌舞	順逆の歌舞	順逆の歌舞
主要装置	神座	藁人形	棺	霊屋/柱

長江中流域三角地帯から見た環瀬戸内海海域の民間神楽

長江中流域三角地帯の民間祭祀を参考にして日本の古代祭祀を考えれば、<タイプA>は「巫女舞」に、<タイプB>は「神遊び」に相当するといえよう。本調査から、<タイプA>と<タイプB>は個々に独立した民間祭祀であったから、「巫女舞」と「神遊び」も全く独立した祭祀であったと考えられる。<タイプB>に相当する「神遊び」が構造化したのが環瀬戸内海海域の民間神楽であることが確認できた。

長江中流域三角地帯の<タイプB>に相当する民間祭祀（「打繞棺」と「除霊」）では、順逆の歌舞がおこなわれ、太鼓が祭祀全体をリードする重要な道具として使われていた。また<タイプB>には神がかりはなかった（神がかりは<タイプA>の「游冥」でおこなわれた）。これらのことから、環瀬戸内海海域の民間神楽について次のことが主張できると思う。

- (1) 順逆の歌舞は神がかりのための技法ではなく（神がかりするには逆に旋回する）、死者や死霊を清める（慰める/鎮める）ためにおこなわれる。
- (2) 太鼓は基本的に死者や死霊を清めるために使われる。

長江中流域三角地帯の死者/死霊祭祀では太鼓による順逆の歌舞をおこなうが、環瀬戸内海海域の民間神楽も太鼓による順逆の歌舞が基本である。この基本形式は日本の民間神楽祭祀でも同じである。このことは、長江中流域と日本の民間神楽の間に連続があることを示す。その他、祭場・祭式・祭具・祭文類にも類似を確認することができた。日中の連続性は高いといわなければならない。また日本の民間神楽の成立・展開の基礎は死者/死霊祭祀にあると考えられる。長江中流域三角地帯と日本の民間神楽祭祀の連続を前提にすれば、日本の民間神楽が我が国固有の文化であると断言し続けることはもはや不可能ではないかと考える。

おわりに

以上指摘したように、日本の民間神楽は長江中流域の民間祭祀と連続性がある。したがって日本の神楽を日本の固有文化とみなし研究を進めるなら、私たちは重大な誤りを犯すことになりかねない。日中相互の実証研究が推進されることを期待したい。

本研究は2006年度財団法人 JFE21 世紀財団アジア歴史研究助成（研究課題名：「長江流域と環瀬戸内海海域における民間神楽祭祀の実証的比較研究」）による研究成果の一部である。詳細な報告は研究代表者と共同研究者による「長江中流域三角地帯の民間祭祀」『広島工業大学紀要』研究編、第42巻、2008年、261～270頁、を参照していただきたい。最後に本研究に多大な協力をしてくださった関係各位に厚くお礼を申し上げたい。